

帆向 七瀬

ゆきてかへらぬ

さながら <sup>さなぎ</sup> 蛹 のようであった。

内に秘めたさまざまに美しいものを、うすくか弱くみすぼらしい皮ひとつで覆い隠して、カムリは蹲っていた。

なぜ彼がカムリというのかは知らない。ほんとうは別の名前があったようだが、とにかく彼はそう呼ばれていたし、ほんとうの名前を知る必要もなかった。カムリ自身も、それで一向に構わない様子であった。

歳の頃は、十かそこらであったように思う。歳相応の顔つきであったけれど、薄汚れていて、髪はぼさぼさ、垢じみた手足にやせっぽちの体のせいで、もっと幼く見えた。わたしがカムリに目を止めたのは、異様に光る目のせいであった。蹲って膝を抱え、ぎゅっと体に力を込めながら、目だけはいつも隈なく辺りを見張っていた。カムリは何に怯えていたのだろう。いや、そうではない。怯えていたにしては、カムリの光は強かった。何かを探していたのかもしれない。絶え間なく動く烏羽色の瞳は、いつもきらきらとしていた。

わたしがカムリに興味を持ったのには、もうひとつ理由がある。

カムリの周りには、いつでも誰かがいた。少ないときにはひとりだが、多いときには、カムリの周りに三重ものひとの輪ができていた。カムリがいつも蹲っていたのは、場末のしみつたれたパブの隅であった。どうやらその主人が、カムリの面倒をみているらしかった。

カムリはここで働いてるのかい。わたしが尋ねると、主人は大げさに首をふった。

とんでもない。日がな一日、あすこにああして座ってるよ。だけどカムリがいると、自然と客がくるからね。それだけで大助かりだ。正直なところ、俺だってカムリにいてほしいんだ。そう言って主人は照れ臭そうに笑った。

なるほどカムリは、ひとを惹きつける子どもであるらしい。カムリの何がそれほど魅力的なのか、わたしが尋ねると、主人はにやりと笑った。今夜あたり、ほら、ここいらに座って聞いているといいさ。

その晩、カムリの周りには三重の輪ができた。耳をそばだてると、どうやらひとりひとり順繰りに、カムリに話をしているらしい。今日店で会った娘がかわいかったのだ、このままじゃ家賃が払えないのだ、来週ようやく国へ帰れるのだ。大騒ぎしてふれてまわるほどではない、けれども誰かに聞いて欲しい。そんな話をカムリにしている、どうやらそういうことのようにであった。カムリはそれに特別反応を返しはしなかった。無表情なまま、時折瞬くだけであった。けれど烏羽の瞳だけは相変わらずきらきらしていて、それが瞬くたびに、何か重要なことばを告げられているかのような気になるのであった。何よりその目はまっすぐ話し手を見つめていたから、話す方としては、ひどく心地がよい。そんなわけで、誰もがカムリに話を聞いてもらいたがるのだ。なるほどと頷いて、ふと目をこらすと、輪の中ほどに、主人も混じっていた。

カムリはいつも、じっと座っていた。時折首を右へ左へと傾げるさまは、まるで見えない誰かと問答をくり返しているかのようであった。

カムリはおよそ寡黙であったから、わたしが彼の声を聞いたのは、彼と出会ってずいぶんたってからであった。

その日ドアを開けると、店は薄暗かった。どうやら店は休業らしい。ドアにつけられたベルが、ガラリと無遠慮に沈黙を破った。その瞬間に、微かに空気が揺れたから、カムリはいるのだなと分かった。薄暗さに目を慣らしてから、ゆっくりといつもの隅へ近寄ると、果してカムリがいた。カムリはわたしに気づいていながら、少しも顔を上げようとはしなかった。例のごとく目を光らせて、そろりそろりと視線を動かしている。

主人はいないのかい。

わたしの声に、カムリは視線を合わせないままに頷いた。わたしは特にカムリに話すこともなく、わたしと彼の間には、背中がむずむずするような沈黙が横たわった。もっともそれを感じていたのは、わたしだけであったのかもしれない。カムリは一向に気にする様子もなく、慎重に視線を動かしていた。わたしが何かを話さない限り、カムリが注意を、僅かもわたしに向けることはなかった。わたしは途方に暮れて、ただゆっくりと移動するカムリの瞳を見つめていた。

五分だったか、それとも一時間だったか、わたしはそうしていた。突然に、カムリの瞼が震えた。カムリの瞳は細められ、その薄い口唇が震えた。耐えきれないというように、ゆっくりと小さな口がひらいた。欠伸だと気づくまでに、少し時間を要した。それほどまでにそれは不自然で、違和感を与えた。その上それは、一度では終わらなかった。何度も何度も、くり返される。わたしは半ば呆然と、それを見つめていた。

そのうちに、カムリの瞳には涙が盛り上がり、尚も続く欠伸に、涙は、長く洗っていないためにうす黒い頬を、するりと滑った。カムリの涙は幾筋も、カムリ自身の頬に痕をつけた。ようやく欠伸がおさまると、カムリは何事もなかったように、抱え込んだ膝に顎を乗せた。

わたしは恐る恐る、カムリに近づいた。カムリはまったく気かけないようであったので、わたしはついに、カムリの隣へ腰を下ろした。

今のはいったい、どういったわけだい。わたしの声に、カムリはすぐには応えなかった。何度か瞬きをくり返し、わたしが店に入ってから初めて、わたしの瞳に焦点を合わせた。そうして見ると、烏羽色だと思っていたカムリの瞳は、深い緑に見えた。底無し沼のように昏く深い緑であるのに、確かに煌めきが潜んでいた。

なみだ抜きだよ。

長く喋らなかつたひとのように、或いは実際そうだったのかもしれないが、しゃがれた声で、カムリは答えた。それは声変わりのまだ訪れない、少年の声であったのに、まるで老人の声のように響いた。

なみだ抜き？耳慣れないことばに、わたしは尋ね返した。カムリはわたしを見つめたままに、うすい口唇をひらいて、息を吸った。

空気抜きと、同じ要領だよ。俺は泣かないから、涙がたまっていく。それはあんまり体によく

ないんだ。だからこうやって時々、なみだ抜きをしなくちゃいけない。

カムリはすらすらと、澁みなく説明した。しゃがれた声はだんだんに、滑らかさを取り戻し、少年らしい声になった。なるほど、そうか。涙は体に悪いんだな。わたしが言うと、カムリは一度瞬いて、わたしから視線を逸らした。そのままカムリは、もう口を開こうとはしなかった。

カムリの声は、幼いながらに耳に心地よかった。少しかすれて、ひそやかな息遣いとともに紡がれる声は、聞くものの鼓膜を、やわらかにかすめた。わたしはその余韻を楽しみたくて、瞼を閉じた。そうして一時間、二時間ののち、カムリのやすらかな寝息を確認して、わたしは店をあとにした。もちろん、ドアベルのついていない、裏口から。

カムリと主人は、どうやら会話をしているらしかった。

もちろん、主人がカムリの世話をしているのだから、それは、当然存在すべきものではあった。けれどもわたしが初めてカムリの声を耳にしたのが、ふたりきりの時であったことから分かるように、カムリは極端に口数が少ない。だからわたしたちパブの客には、それは主人の一方的な呼びかけのように聞こえた。

カムリ、飯ができたよ。

カムリ、風呂が沸いたよ。

調子はどうだい、カムリ。

響くのは、主人ひとりの声であった。けれどもよくよく注意してみると、カムリはそのどれにもきちんと頷いていた。

カムリ、腹は空かないかい。こくり。

こんな感じだ。しかしカムリはすべての問いに頷くので、彼が本当に主人のことばに応える気があるかどうかを知るには、また別の方法が必要であった。主人はおそらくそのために、声をかけると同時に、カムリの目の前に、そのがっちりした腕を、ぬっと差し出していた。

カムリ、風呂に入るかい。ぬっ。こくり。

ここでカムリが主人の手をとらなければ、それはノーということだ。すると主人は仕方なしに腕を引っ込める。奥に入ったかと思うと、しばらくして、蒸しタオルを片手に再びカムリの真正面に立つ。

カムリ、タオルで体拭きな。ぬっ。こくり。

ここでようやくカムリは主人の手をとる。主人は安心したように、蒸しタオルを手渡す。たとえばこんな具合だ。これはめったに口を開かないカムリにとって、紛れもない会話であった。

そういえば、カムリが風呂に入るかと問われて、入ると答えたことはなかった。カムリは埃のたまった店の隅から動くのをひどく嫌がったから、時折用を足すために重い腰をあげるくらいであった。食事も、風呂代わりに蒸しタオルで体を拭くのも、すべて薄暗い店の隅であった。さながらそこは彼の領地で、そこを離れた際に、誰かに奪いとられるのを、警戒しているようであった。

確かにカムリは、常に自分の周りに、見えない壁を用意していた。それは周到に張り巡らされ、カムリが許したものにしか、開かれなかった。たとえばそれは、主人であつたり、馴染みの客のひとりであつたり、おそらくわたしも、入ることを許された、数少ないうちのひとりであつた。

カムリの歌は、奇妙なものであった。

限りなく低くハミングしていたかと思うと、唐突にわたしの知らないことばが混じる。聞いたこともないメロディであったのに、聞いているうちに、懐かしさが胸に忍び寄り、思いのうちを占拠する。そのメロディはまるで、原始のリズムを、思い起こしなぞっているかのようであった。

わたしがそれを聞いたのは、またもカムリとふたりのときであったから、おそらくそれを聞いたものは、ほとんどないだろう。できれば、わたしひとりであったのだと思いたい。カムリには、そう思わせるところがあつた。

自分が何かカムリに関して知っているところがあると、それをカムリとふたりだけの秘密であると、思いたくなるのである。もちろん、それはわたしの単なる傲慢であったから、カムリに聴られるわけにはいかなかった。それを知られた途端に、開かれた壁が閉ざされるのではないかと、おそらくわたしだけではなく、誰もが恐れていた。もっとも今思えば、カムリはわたしたちのそんな恐れも、お見通しだったのだろう。

それでも彼は、いつものとおりに、蹲って煌めく瞳を巡らすだけであつた。

カムリはあまりに無表情であった。

誰かがどれほど涙を誘う話をしようと、また抱腹絶倒せずにはいられない話をしようと、カムリは眉ひとつ動かさなかった。ただまっすぐと、泣きながら、或いは笑いながらことばを紡ぐそのひとを、見つめるだけであった。以前になみだ抜き話を聞いていたから、どうやらカムリは泣かない子どもらしいというのは分かった。泣かないのか、或いは泣けないのか、それをカムリに尋ねるのは憚られたから、結局のところ、その原因は分からず終いになった。なみだ抜きの件があったから、笑わないのにも、きっと何か理由があるのだろうと、わたしはわざわざ店が休みの日を選んで、カムリを訪ねた。

その日も、休みのはずなのに、店のドアは施錠されていなかった。もしかすると、わたし以外にも、こうしてカムリを訪ねるものがあるのだろうか。その想像は、あまり気分のいいものではなかった。わたしだけの特等席だと思っていたものが、実は他人と共用であったと知らされたときのような恥辱と疎外感が、胸の奥底をかすめた。

カムリはやはりそこにいた。

その日はいつにもまして、カムリの腕には力が込もっていた。ぐっと膝を引き寄せ、その上に顎をのせて、カムリは目を閉じていた。その深緑が伏せられていることは本当に珍しかったから、わたしは驚いてしばらくカムリをじっと観察した。それでもカムリに動く気配はなかったので、眠っているのだろうか、わたしはゆっくりと近づいた。するとふいにカムリは、右目だけをうっすらと開いた。ちらりとわたしを窺うと、またすぐに瞼は閉じられた。まるでそれは、わたしに自分が眠ってはいないのだと知らせるためのようであり、わたしは苦笑をもらした。

カムリの隣へ静かに腰をおろすと、獣の匂いがした。荒々しく、決して慣らされることのないその匂いは、確かにカムリのものであった。わたしはカムリに触れようとして、躊躇った。簡単に触れることをよしとしない厳格さを感じ、わたしは黙って手をおろした。しばらく黙って、わたしはカムリがいつものとおり、目をさまよわせるのを待った。カムリの方でも、おそらく、わたしが口を開くのを、待っていたのだろう。ふたりきりの我慢比べのような時間が、流れた。先に根負けしたのは、もちろんわたしの方であった。カムリに、じっと待つことで勝てるわけがなかった。

どうしてカムリは、笑わないんだい。僅かに敗北感のにじんだ声で、わたしは静かに尋ねた。カムリはようやく目を開き、ゆっくりと視線をわたしの瞳に投げ掛けた。

わらい溜めだよ。

またも聞き慣れない単語を、カムリは平然と口にした。まるでそれが、万人に共通のことばだと思っているようであった。わたしはオウム返しに尋ね返す。

わらい溜め？

ここでようやく、カムリはそのことばが通じないことに、気づいたようであった。カムリはじっとわたしを見つめたまま、少し首を傾げて瞬いた。

笑いそうなときに、笑うのを我慢するんだよ。そうやって笑いを溜めておくと、いざってときに、笑えるんだ。

カムリは饒舌であった。初めて話したときよりも、ずいぶんと舌が軽やかで、ことばに熱がこもっていた。

いざというとき？わたしがその熱を確かめるように尋ねると、カムリは一度瞬いて、わたしから視線を逸らした。

笑いたくないし笑えそうもないけど、笑わなくちゃいけないときだよ。

わたしは胸にずしりと重石がのった気がした。胸の中の空気がざわめいた。カムリの背負うものの重さに、今更ながらに気づいたような、そのとげとげしさに、一瞬触れたような切なさが、波となってわたしを襲った。

わたしはカムリの腕に触れた。触れたところがぴりぴりとしたけれど、構わずカムリを腕に抱いた。カムリは相変わらず身体中に力を込めたまま、わたしの腕に収まっていた。獣の匂いが鼻をついた。カムリの微かな、確かな息遣いに耳をすませると、それはまるで物語のようであった

。



それはいつもの問いかけであった。主人は半ば諦めた様子で、小さく笑んで口を開いた。

カムリ、風呂に入るかい。ぬっと主人の筋肉質の腕が、カムリの目の前に突き出された。こくり、カムリが小さく頷いた。主人は早々に腕を引っ込めようとした。

けれどもカムリのか細い腕が、それを引き留めた。主人は驚いたようにカムリを凝視した。わたしも固唾を飲んで、成り行きを見守った。主人は数度瞬いて、慌てたようにそうか、と言ってカムリの腕をひいた。カムリはそれに大人しく従い、あれほど執着して死守してきた埃っぽい隅っこを、あっさり離れた。

主人はカムリの手を握り、店の奥へと向かった。奥の扉に消える瞬間、カムリが何かを呟いた。すると主人は慌てて引き返し、はさみをとって、再びカムリの手をひき、今度こそ店の奥へと消えた。ほつれて伸び放題の髪の間隙から覗いたカムリの瞳は、やはり何かを探しているようであった。

はじめ、それが誰だか分からなかった。一時間ほどして、店の奥から主人と共に現れた少年は、幼いながらに端正な面立ちであった。東洋系の顔立ちは、あどけなさを残しながらも、きりりと引き締まっていた。烏羽色の髪は、不揃いに短く切られてはいたが、艶と深みをもって、少年の顔を縁取っていた。

主人が戸惑ったようにその少年の腕をひき、カムリ、と少年に呼びかけたので、わたしはようやくそれがカムリだと分かった。他の客も、どうやら同じらしかった。

一瞬の静寂ののち、店内は大歓声に包まれた。あるものはカムリに駆け寄り、あるものは興奮して何事かをまくしたてた。わたしは呆然とカムリを見つめていた。

数人にまわりつかれながら、カムリは主人に手をひかれ、わたしのいる方へとやってきた。わたしがいたのは例の店の隅で、主人はカムリをもとの場所へ座らせようと思って連れてきたのだろう。しかしそこに辿り着いても、カムリは一向に座ろうとはしなかった。ただそこをじっと見つめたかと思うと、深緑の瞳をいつものように巡らせた。わたしはじっとカムリを見つめ続けた。

ふいにカムリと視線が合った。そのまま数秒、わたしはカムリと見つめ合った。店はいつの間にか、静まりかえっていた。カムリが瞬いた。次の瞬間、カムリはほろりと笑った。それは、生命の生まれる稀有な瞬間に立ち会ったような感動を、その場にいた全員にもたらした。わたしはその笑みに酔っていた。おそらくそれは、わたしだけではなかったはずだ。店内には、恍惚とした雰囲気漂っていた。わたしはふと、わらい溜めのことを思い出した。

いざってときに、笑えるんだ。

笑いたくないし笑えそうもないけど、笑わなくちゃいけないときだよ。

いけない、終わってしまう、とわたしは感じた。カムリを止めなければ、とわたしは足に力を込めた。けれど意に反して体は動かず、縫い止められたかのように、呆然とつっ立っているだけ

であった。カムリは笑んだまま、わたしを見つめ、ふいと視線を逸らした。そのまま店の出口へ向かって足を踏み出す。不意をつかれた主人の手から難なく逃れ、カムリはゆっくりと出口へ向かった。誰も、動くことはできなかった。

カムリの細い手が、ドアにかかった。ガラリと鳴ったドアベルは、終焉を告げる合図のようであった。

終わりはあっけなかった。

夕闇の中へとカムリは踏み出す。出口から一步ほど離れたところで立ち止まる。カムリは悠然と、太陽も月もない空を眺めた。ゆっくりと両腕を掲げる。まるで神聖な供物を、空に捧げるようであった。カムリはふり返った。その目はまっすぐにわたしを捕えていた。カムリの笑みが深まる。ふっと糸が切れたように、カムリは崩れ落ちた。最期にか細い腕が、優雅に宙を撫でた。

見事な羽化であった。

あの子はいいい子だったさ。あたしは一昨年息子を亡くしたんだけど、これがまたカムリにそっくりだね。なんだか息子に話す気分で、いろいろとくだらないことまでカムリに話したんだよ。けどあの子、嫌がりもしないでね。ひとつひとつ、黙って聞いてくれるんだよ。ほんとにいい子だったさ。

あいつがやってきたのは、真冬の寒い日だ。しんしん、雪がふりまくって、町が雪に埋もれそうな日だったね。そうだっていうのに、あいつときたら、ぼろ布一枚身体に巻き付けただけで、裸足で雪を踏みしめてるんだ。おれはとにかくびっくりしてね。慌ててこの店に連れてきたってわけだ。ここの主人は面倒見がいいからね。ここならなんとかしてくれると思ったわけさ。けどあいつがあんなに、なんていうかな、かけがえのないやつになるとは、思ってもみなかったよ。

おれはヤツが大好きだったよ。なに、はじめは妙なガキだと思ったね。黙りこくって、埃にまみれてじっとしてるんだ。なんてしみったれたガキだと、呆れたよ。けどヤツときたら、おれの話をもじって聞いてるんだ。女房に逃げられて、ろくに仕事もしねえ、酒もやめられねえこんなおれの話をも、真剣に聞いてるんだよ。おれは感激したね。なんていうかな、初めてまっとうに生きようと思ったよ。あいつはいいヤツだ、間違いねえ、おれが保証する。

私が見たところ、カムリはもう覚悟をしていたようですね。風呂に入ったのも、死に<sup>ごしら</sup>拵えのつもりじゃないでしょうか。しかし、いやはや、見違えましたね。なかなかの美少年だ。なにか覚悟を決めた、そんな美しさがありましたね。それにあの最期の笑み。あれがたかだか十歳の子の笑みだとは、到底思えないなあ。本当に、きれいな子でした。

まっすぐひとの目を見る子だったね。

わたしは、懐かしむように口々にカムリを語る客たちを避けて、店の最奥のカウンターにいる主人へと声をかけた。主人はひとり、覇気のない顔で黙々とグラスを磨いていた。そんな主人を気遣って、誰も注文をしようとはしなかった。主人はわたしの声にようやく顔を上げ、弱々しくほほ笑んだ。

そうだな、いい子だった。だけどあの子は、目が見えなかったんだよ。だからあんなにきれいな目だったんだ。

わたしは主人のことばに息を呑んだ。まさか。あんなにまっすぐ、ひとの目を捕えていたじゃないか。

けれど主人は首を振った。信じられないだろう、俺だってそうだったさ。だけどあの子がここに来たはじめての頃、俺はただで置いてやるのはあんまりだと思って、あの子を働かせようと思ったんだ。そしたらどうだい、あの子、こう言ったんだ。おれ、ここにあるものは見えないよ、ってね。

わたしは呆然とした。まさか、と思った。しかし、それならば、問いかけの度に主人が腕を差し出していたのも、頷ける。それではいつも瞳を巡らせていたのは、一体なんだったのだろう。誰かが主人を呼んだ。主人は短く返事をして、カウンターを出ていく。わたしはひとり、ぼんやりと思いを巡らせた。

泣かない子、笑わない子、賢く、寡黙な子。蛹のように蹲り、最期、見事に羽化してみせた。その目はいつも、何かを探していた。わたしはカムリのいた隅に、カムリがしていたように蹲った。身体を強張らせ、膝を抱え込む。目を強く閉じると、おそらくカムリも見ていた、懐かしい暗闇が広がった。

なみだ抜き。

俺は泣かないから、涙がたまっていく。それはあんまり体によくないんだ。だからこうやって時々、なみだ抜きをしなくちゃいけない。

わらい溜め。

笑いそうなときに、笑うのを我慢するんだよ。そうやって笑いを溜めておくと、いざってときに、笑えるんだ。

おれ、`ここに`あるもの`は見えないよ。

ふと引っ掛かる。ここにあるもの？こことはどこだろう。この店だろうか。まさか、それはおかしい。ではこことは？この世のことだろうか。この世にないものであれば、見えるということだろうか。

カムリは何を見ていたのだろうか。何を探していたのだろうか。彼は探しものを見つけたのだろうか。

カムリの笑みが浮かぶ。綻びるように咲いた笑みであった。

その目はまっすぐに、わたしを捕えていた。

何かを見つけた？

その目はまっすぐに、わたしを捕えていた。

探していたものを？

その目はまっすぐに、わたしを捕えていた。

わたしを。

わたしを？

目を開く。開いたのに、そこに広がっていたのは、やはり懐かしい闇であった。喧騒が遠い。ちらり、と視界の隅に何かが映った。目をこらすと、また何かがかすめる。それを目で追ううちに、気づけばわたしは、カムリと同じように、瞳を巡らせていた。ぐっと、さらに身体に力を込める。立ち上がろうという気は、おこらなかった。ここを離れたが最後、もう二度と息をすることが許されないのではと思った。

ちらり。また何かがかすめる。あれを。あれを捕まえなくてはならない。わたしはそれを無心に目で追う。

わたしはここにいないなくてはならない。わたしはあれを捕まえなくてはならない。わたしは――

「カムリ。」

だれかがとおくで、わたしをよんだ。